

『浮城物語』の近代

齋 藤 希 史

- はじめに
- I 新聞紙の小説
 - II 報知叢談から報知異聞へ
 - III ルビと挿図
 - IV 自叙体
- おわりに

はじめに

明治二十三年一月十日、そして十一日、十三日、十四日と、『郵便報知新聞』は第一面紙頭に、「来る十五日以降の報知新聞は更に左の條條を掲げ候江湖の諸君益々御愛讀被下渡候」の一文で始まる社告を掲げた。五条にわたるこの社告のはじめに「報知異聞と題する一種の新作小説を掲ぐべし」と予告された小説、すなわち単行されるさいに『報知浮城物語』と名付けられた¹⁾それが、本稿の扱うテキストである。明治十六年の『齊武経国美談』の刊行から七年、龍溪にとって二つめの小説は、その引き起こした論争と併せて、小説における近代を語る上で欠くことのできない存在であり、もちろん、それを主題とした論考も少なくはない。なかでも柳田泉「矢野龍溪『浮城物語』について」²⁾、越智治雄「『浮城物語』とその周囲」³⁾「『浮城物語』から『海底軍艦』まで」⁴⁾などは、この小説を読むにあたって示唆するところ、まことに大きい。本稿はこれら従来の論考を踏まえた上で、『浮城物語』が〈小説〉として企図した〈近代〉がいかなるものであったのかを、いましテキストに即しつつ、探ってゆきたいと思う。

I 新聞紙の小説

矢野龍溪『浮城物語』を論じるにあたっては、まずそれが新聞小説であったことに留意する必要がある。想定されている読者とは、すなわち『郵便報知新聞』の読者に他ならず、それは

龍溪が欧州滞在から帰国後着手した新聞改革の結果獲得した購読者数万⁵⁾であった。

『報知異聞』が『郵便報知新聞』に予定より一日遅れで連載を開始した明治二十三年一月十六日のちょうどその翌日、『読売新聞』の「文学上の主筆」(『読売新聞』明治二十二年十一月二十三日「社告」)であった坪内逍遙は、『新聞紙の小説』と題する一文を『読売新聞』に二日間にあわて掲載した。

夫の新聞紙に初めて小説の載せらるゝや世人多くは目を見張り新聞紙は新らしき事實を報道すべきものなるに事ふりたる^{つくりものがたり}作物語を掲ぐるを理に於てある可からずなど罵る者多かりし然るに西洋の新聞紙にも小説はありと噂するに及びて非難の聲いつしか消えつ今は厳めしき向きの新聞紙の外は何れも競つて小説をかゝぐさすれば初め小説を斥けしが道理か後にこれを容れしか是か〔原文総ルビ、以下同〕

「夫の新聞紙に初めて小説の載せらるゝや」とは、小新聞の雑報続き物のことを言うのではなく、明治十九年一月、『読売新聞』が「純然たる小説」⁶⁾を紙面に登場させ、また同年九月、龍溪の改革案にともなう大新聞の雄たる『郵便報知新聞』も『~~読売~~報知叢談』の欄を設けて翻訳小説を連載したことなどを指すとしてよい。「罵る者」としては、福地桜痴が『東京日日新聞』紙上で『郵便報知』の小説掲載を非難したこと⁷⁾などが思い起こされるであろうが、かく言う桜痴自身、翌二十年にはディズレイリの Contarini Fleming を『^{ファンタリニー}昆太利物語』(初め『^{ファンタリニー}昆太郎物語』)として塚原渋柿園と共訳で『東京日日』に連載していること、勢いのしからしむるところであった。

吾等思ふに新聞紙に小説を載するのは是非は西洋の^{てぶり}手振に問ふに及ばず新聞紙の務めは素より報道のみにあらねば^{たのしみ}読者の娯の料作るもよし但し新聞紙の読者は少数人にあらずして(内實は兎も角も表向きは)社會全體なれば賢愚老少男女を問はず皆新聞紙を読むといふことを忘る可らず是れ新聞紙の冊子と異なる要點にして冊子の著者と新聞紙の記者と用心を異にすべき所以なり……第一冊子は價も貴く又品によりては専門家にあらざれば買はぬものもあり新聞紙は然らず些も雅心なき者もフト買とりて読むことあるべしされば記者にして注意せざれば娯ませんとて不快を覚えさせ益せんとして害を蒙らし思はぬ罪^{つくる}を作ことあらん……就中小説は少年の注意を惹くものなれば記者力めて當世に注目し社會と我との關係を察せずは不本意の危害を醸すことあらん

さて、新聞に小説を掲載することの是非についての結論はあっさり^{たのしみ}と下される。「読者の娯」を提供するもまたよし。逍遙の新聞小説に対するスタンスは冒頭から明らかだ。『小説神髓』

で主張されたような美術としての小説ではなく、娯楽としての小説がはじめからの前提なのである。その上で、いかなる小説が新聞にふさわしいかという議論が展開されることになる。逍遙は、単行される小説と新聞に掲載される小説とを、読者という視点から明確に区別する。新聞はすでに「社會全體」のメディアであって、対象となる読者がいわば不特定多数であることに留意せよ、その影響力が——小説の場合はとくに青年に対して——きわめて大きいことを、何よりも肝に銘じておかねばならない、と言うのだ。なによりも「新聞紙」というメディアの質が、すべてを規定する。

若しかの美術といふものが絶對的にいはるものならば吾等は信ず裸体美人の像も淺ましき筋の書も（其手際だに巧妙ならば）共に美術の仲間に入るべし併^{しかし}さるは絶對的にいふ美術の美にして社會^{よのなか}に見すべき物とは思はずこれをも絶對的美術家は美とすべしさりながら廣^{しゅうくわい}くいふ社會には階級幾段もありて人の品さまざまなり……兎に角に新聞紙の小説には吾人か、る作の載せられざるを願ふむしろ有益にして面白きものか又は無害にしてうるはしきもの佳し

「小説の美術たる由を明らめくせば、まづ美術の何たるをば知らざる可らず」との揚言に始まる『小説神髓』の立論は斥けられ、「有益にして面白きものか又は無害にしてうるはしきもの」こそが新聞小説として最上とみなされる。そして、それを後退だとする非難が『小説神髓』の読者から浴びせられるのを先取りするかのごとく、あわてて補足が加えられる。

斯く言へばとて吾等敢て勸懲主義を復興せよといふに非ず社會と新聞紙との關係に留意し禍の種を蒔かざれといふのみ此筋の議論は夙に報知新聞にて論ぜしことあり又女學雜誌にても論ぜしこともあり只彼と此と異なる點は彼は此論を小説全體の上にいひ吾等は新聞紙の小説にのみいふ……蓋し新聞紙の小説は純然たる文學的小説を以て見る可らずよし美術として欠くる所あるも新聞紙たるの義務即ち廣く益し廣く樂ますといふ點に於て本分を盡くす所あらば十分賞美して當然なるべし

「報知新聞にて」「女學雜誌にても」は、文脈からも明らかではあり、また『逍遙選集』別冊第三卷に収めるさい「報知新聞が」「女學雜誌が」と改めてあるように、逍遙がその紙上で論じたことを言うのではない。具体的に誰のどの論説を指すのかは特定しがたいが、矢野龍溪や巖本善治ら、小説の通俗・教化の役割を重視する啓蒙家の議論を念頭に置いていることは間違いないだろう。彼ら啓蒙家と逍遙との違いは、「彼は此論を小説全體の上にいひ吾等は新聞紙の小説にのみいふ」という一点にしかない。裏返せば、新聞小説に限るなら逍遙の立場は啓蒙

家のそれと何ら変わるところがない。美術としての小説の価値は、「純然たる文學的小説」では第一義でありこそすれ、「新聞紙の小説」では「廣く益し廣く樂ます」ことが本分である以上、それを云々することはナンセンスなのだ。新聞か単行かというメディアの区別が小説そのものに及び、価値基準ははっきり二分されるのである。

然るに怪しむべきは今の作者及び批評家なり後者は新聞紙の小説を以て兎もすれば文人上下せんとし文人もまた之にかゝづらひて少數の褒貶に目^は瞠り耳立て數欄の小説を綴るにだに彫琢の苦勞^{みだし}尠からざらんとす……夫れ文學を益せんとらば世に其筋の雑誌多し彼の欄内に掲げてこそ色をも香をも知る人に遭はめ當世の景況を知らんとする新聞紙の讀者は概して題目を走^{はしり}讀して心を惹く所に目を注ぐ何の暇あつて賞鑑を事とせん

「新聞紙の讀者」の特性を考えることが小説の性格にまで及ぶことは、逍遙がこう述べるよりさきに、実作する側の立場からすでに森田思軒が語っていた。『郵便報知新聞』に連載していた翻訳小説欄「西文小品」を明治二十二年五月十一日より『國民之友』に移すにあたって思軒はこう述べている。

嘗て其の一篇を報知新聞に載せたり然れとも新聞は素と忙劇の場にして讀む者の一目して過くるに遇ふを得れば斯を幸となす然れとも西文の語路繚繞なる加ふるに譯の迂拙なるを以てす謂はゆる一目而過の間に了々ならしめむと欲せは勢ひ往々省畧する所と擷取して已む所とあるを免れず是をもて其極讀者と譯者と交も慊焉たるに歸して止む故に去て之を此に掲ぐ蓋し雑誌を讀む者は更に一段の閑日月あるを信すればなり

新聞と雑誌の違いではあるが、小説もまたメディアに応じて書かれるべき事が、実感として吐露されていよう。続き物ではない「純然たる小説」が新聞に登場して三年、いかなる小説が新聞にふさわしいか、共通の認識はたしかに形成されつつあった。もちろん思軒は、新聞の読者と雑誌の読者との時間的余裕の差を問題にしているのであって、逍遙がすでに読者としての資質それ自体の差をも問題にするのとは力点を異にしている。或いはそれは『郵便報知新聞』と『読売新聞』とがそれぞれ大新聞と小新聞であったことに起因しているのかもしれないが、現実にはその差は小さくなりつつあった。

逍遙に戻ろう。

只怪しかるは批評家なりもと新聞に載せられて後に合本となりし者をさながら新作を評するやうに小説の体を成さずなど罵る

この両者の区分を混同する作家や批評家、なかでも批評家は当然非難されるべきであり、新聞連載小説がのちに単行本として出版されたとしても、批評はその出自を見た上でなさねばならない、と言う。そして「新聞紙」と「冊子」の区分はこのあとも執拗に繰り返される。が、ここでは先を急いで最後に簡条書きにされた提言を見てみよう。

第一 小説にも當世の事情を報道するの意を含ませ成るべく當世を本尊とし現在の人情風俗又は傾き等をしめすべし

第二 誰が見ても同感し得べき事、さなくとも多數の人に解る事、即ち樂屋落ちにならぬやうにすべし

第三 親子兄弟並びて讀むとも差支なきやうに

第四 ^{むかし}過去の事又は^{ゆくすゑ}未來の事を種とせば成るべく當世と異なる点を今の人に知らしむるやうに

第五 所詮娛ましむると同時に當世の有様を報道するか然らざれば^{いくらか}多少教へ導く心ありたし

逍遙の提言はあくまで新聞小説に対するものであった。そしてまた『浮城物語』もまさしく新聞小説として登場したのであった。内田魯庵の批判に応えるかたちで講演された「浮城物語立案の始末」（『郵便報知新聞』明治二十三年六月二十八日－七月一日⁸⁾）にも「讀者に娛樂を與ふるは小説の正産物なり、世を矯め俗を激し、人を戒め時を諷するは是れ小説の副産物なり」とあるように、この点において逍遙と龍溪の立場に違いはないように見える。では魯庵の非難は「もと新聞に載せられて後に合本となりし者をさながら新作を評するやうに小説の体を成さずなど罵る」類のものであったのだろうか。この問題を考えるためには、まず『浮城物語』を新聞連載当時の姿に即してきちんと見ておく必要があろう。

II 報知叢談から報知異聞へ

「一種の新作小説」として『報知異聞』が予告されたとき、同時に「將某詰手及び其の圖を掲げ置き候江湖の諸君續々之れに對し名案を投ぜられんことを請ふ」（『郵便報知新聞』明治二十三年一月十五日「社告」）なる新企画もまた用意されていた。「不善ならぬ娛樂」（『浮城物語立案の始末』）によって読者を引きつけるという点では詰め将棋も小説も區別はない。とはいうものの、ただ棋譜を載せさえすればよい詰め将棋と違って、小説を語り始めるのなら、それにはそれなりの枠組みをしつらえる必要があった。「紙面の都合により」（同上「社告」）予定より一日遅れで連載を開始した『報知異聞』は、実録を装うことを忘れなかったのである。そ

の「緒言」が「大分縣豊後國南海部郡，舊佐伯藩領に日向泊なる一漁村あり」で始まるのは、佐伯の出身である龍溪と小説の主人公の上井清太郎とが同郷であることを暗黙のうちに示して、「去歲明治廿二年外國郵便を以て伯父某の許に一函の書を送致す……其書傳へて社員の手に至る」という記述の信用を増そうとの企図による。付け加えるなら、第二回には清太郎が「嘗て郷に在て秋月、楠兩先生の門に遊」んだことが述べられ、龍溪が秋月橋門と楠文蔚に学んだこと（『龍溪矢野文雄傳』）と重ね合わされている。

之を讀むに清太郎自家身上の經歴史にして其事絶快，人をして魂飛び神遊はしむ宛然一個の好小説なり乃ち繁を荊り冗を去て更に修飾を加へ題して報知異聞と云ふ書中記する所の事々其の年月詳かならず然れども世に知られたる事變に徴して之を考ふるに第一回發端は蓋し明治十一年の頃より始まる者とす

その手紙に書かれた内容そのものがまるで小説のようだ、とした上で、「繁を荊り冗を去て更に修飾を加」えたと言う。ちょうど「セルキルク己が患難を経たりし事を書記し……ダニール此書を得て之をロマンの資に取りて翻案し」（横山由清『魯敏孫漂行紀略』附載）たのと同様、つまり「修飾」以前のテキストは実録というわけだ。が、その〈実録〉をあまりに真に受けかねない読者の存在も察知して、あらかじめ断りも入れておかねばならない。

又た書中著大の事變にして内外の新紙に記せざるもの尠なからず其跡或は疑ふへきあらは讀者一部の小説として之を恕する可なり

〈実録〉そのものにも怪しいところがあるが、そこはそれ、その手紙を小説として受け取れば済むこと。だが、その〈実録〉への疑いが上井清太郎の實在にまで及ぶことはない。「緒言」の記す経緯の真実性は揺らぐことはなく、嘘をついているとしたらそれは上井清太郎なのであって「緒言」の書き手ではないのである。

原書は日記の類なれば總て本人の自叙体を用ゆ本社之を修飾する亦た其舊に依る書中「余」と稱するは上井清太郎自家を指すものと知るべし

したがって続けてこのように記されても読者には何の違和感もない。「自叙体」の問題については後述するが、とりあえずここでは、それが小説の実録性の担保を小説内の人物に負わせてしまうはなはだ巧妙な手段として採用されていることを指摘しておこう。そしてそのためには「緒言」の存在は不可欠である。果たしてどこからが「新作小説」なのか。「緒言」はどちらに

属するのか。報道の側か小説の側か。

実録を修飾して小説に仕立て上げるという手法は、龍溪のよくなじんだところであった。そもそも彼の小説著作の出発点は、「實事中ニ於テ少シク潤飾ヲ施」（矢野龍溪「^齋経国美談自序」）すことにあったのである。さらに一步進んで、テキストを額縁で囲うことによって、虚構と事実との橋渡しをしようという試みについてなら、すでに『報知叢談』が行なっていた⁹⁾。『郵便報知新聞』はまず明治十九年九月十九日のその「廣告」でこう予告する。

本紙上に一種の小説を相掲げ候かねての^{もくろみ}計畫に候處何分改革早々にて^{このところ}是處二三日中は手廻りかね候へ共先つ取敢へず茲に其仕組を御吹聴申置候

……

右社友九名更るへ三四日讀切りの小説を譯述し又は自作し匿名にて之を本紙上に載する事〔ルビは適宜省略〕

「社友九名」とは、藤田鳴鶴を筆頭に、森田思軒や尾崎學堂、そして龍溪自身を含めた九名なのだが、『報知異聞』でもそうであったように、まずそれが〈小説〉であることがあらかじめ予告される。そしてこの連載は「文苑の^{はな}英華を^{うてくらべ}闘はす腕試」であり「廣く讀者諸君の公評を乞う」体の企画であった。この「廣告」は二十日以降は「社告」と名を変えてさらに五日間にわたって掲げられ、三十日には「小説掲載廣告」として「豫ねて御吹聴申置候社友輪番起草の小説愈々明一日より西洋風俗記の次に一欄を設けて掲載し始め候」と読者の注意を促した。ここまでは、短篇読み切りの連作を誰しもが予想したに違いない。だが明るる日に掲載された「小説」は、読者の予想をおそらくは越えていた。

社員矢野の知人なる在新嘉坡英人ジョセーブ、クラーク氏より最近の郵便にて左の書面を寄られたり

すでに小森陽一が指摘しているように、この手紙の日付が「千八百八十六年九月十五日」であるのは、現実の十月一日という時間を考慮したものであり、また、龍溪の紙面改革を宣した「改良意見書」が去る九月十六日付の『郵便報知新聞』に掲げられたことと無関係ではあるまい。付け加えるなら、十月八日に第一話の「志別士商人の物語」が終えられた後に一字下げて、

^{ジョセーブ クラーク}徐世、具羅氏第一回の通信は此にて畢りたれども明九日横濱入港の東西會社の郵船便には必ず其第二回通信到着致すへき筈に候へは一兩日中には引續て種々の奇話を譯出致す様相成る積に御坐候

と、ことごとしく述べられたり、翌十日には、「嘉坡通信報知叢談續載廣告」として、

右具羅氏通信の第二稿豫期の如く昨九日夕到着致候間直ちに次號即ち明後日十二日刊出の紙上より續載しはじめべく候

と、念入りな断りが掲載されたりと、その実事への橋渡しは周到である。そしてその手法は『報知異聞』とまったく同一と言ってよい。「種々の奇話」の真偽を『郵便報知新聞』は担保しない。「徐世、具羅」もまた然り。「奇話」を募集した館主「ロイ、ミツチエル」も、関知しない。嘘をついているとしたら、入れ替わり登場する語り手たちなのだ。だが、幾重にも額縁を嵌めることで、いつのまにか小説は実事へと地続きになってゆく。まるで人から人へと伝えられてゆくうわさ話のように、嘘であったかもしれないものが、次第に本当らしさを帯びてしまうのだ。

しかしこれは、「社友輪番起草の小説」ではないのか。予告で掲載の位置まで指定するのは、読者にそれを見誤らせないためではないのか。明らかに『報知叢談』は小説として予告されたにも関わらず、新聞記者の手練手管でいつのまにか実事が紛れ込んでくる。「〈虚構〉の小説欄を〈事実報道〉と明確に区別するのではなく、むしろ〈事実報道〉の一環としてくみ込んでいくという編集意図」（小森陽一）という指摘は裏返しに読むことも可能だろう。小説が事実報道をその一環としてくみ込んでゆくのだ、と。

Ⅲ ルビと挿図

『報知異聞』が新聞連載中に微妙にその姿を変えていることは、これまで注意されていない。たとえば、ルビの振り方。初めは右ルビ、しかも純粹に読みだけを示すものであったのが、第十五回以降は、ルビは左に移動し、読みのみならず、しばしば俗訓も示すようになる。「火光の發灼せし場處は其の位置、船を隔て、上流八九町の處に在るか如し」（第十五回 火焰山）[原文左ルビ]といった具合で、ルビの中に読みと訓が混在しているのである。実は第十五回以前にも、「汝曹」（第八回）や「海鎮」（第九回）など純粹に読みを示すとは言いがたいものもあり、事実、読みを示す総ルビに全篇を改める『新嘉坡浮城物語』（明治三十九年一月）にあたれば、どちらも「汝曹」「海鎮」のごとく改めてあるのだが、少なくとも、「發灼せし」のような、ルビに従っては読み下すことのできない例は存在しないのである。

さて、右に読み、左に訓を振る手法そのものは新しいものではないが、明治時代のテキストを言うなら『西国立志編』、さらに小説なら『花柳春話』が直ちに思い浮かぶだろう。特に『花柳春話』においてそれが用いられている背景には、中国通俗小説の施訓に学ばれた技法と

『浮城物語』の近代（齋藤）

しての意味も存在していること、つまり『西国立志編』の啓蒙と漢文戯作の遊戯とをあわせもつ手法であることは、すでに述べたことがあるが¹⁰⁾、『報知異聞』の場合も基本的にはそれを踏襲すると見てよい。ただ、読みも訓もまとめて左に振ってしまう方法は¹¹⁾、どうも他に見あたらず、あるいは『報知異聞』の独創によるものかもしれない。さらに、『郵便報知新聞』の他の欄はすべて右傍に読みのパラルビを振るのみであり、『報知異聞』に先立つ『報知叢談』欄も同様である。つまり、第十五回以降の『報知異聞』は、左ルビの存在によって、紙面の中で他の記事と明確に区別される標徴を帯びることになるのだ。

加えて、その挿し絵についても、第十五回付近を境に、大きな変化が見られ、それはルビの変化と連動しているように思われる。以下、従来の論が単行された『浮城物語』、はなはだしくは筑摩書房版『明治文学全集』所収のそれにもみ拠って論を立てることが多いことを踏まえ、いささか冗長ではあるが、ここに新聞連載時のすがたを表によって一覧してみよう。

日付	回目〔十五回以降は左ルビ〕	ルビ	挿図
1月16日	緒言 第一回 小車囊 かばん	右・読	×
1月17日	第二回 班超傳	右・読	×
1月18日	第三回 好丈夫	右・読	×
1月19日	第四回 吟詩	右・読	×
1月20日	第五回 密話	右・読	×
1月21日	第六回 大事業	右・読	×
1月22日	第七回 新版圖	右・読	◎（地図）
1月23日	第八回 連判狀	右・読	×
1月24日	第九回 部署 やくわ 、訓練 くんれん	右・読	×
1月25日	第十回 大演習	右・読	×
1月26日	第十一回 新發明	右・読	×
1月27日	第十二回 香港	右・読	×
1月28日	第十三回 地理、風俗	右・読	×
1月29日	第十四回 <u>ラボアン</u> 灣	右・読	◎
1月30日	第十五回 <u>ひのやま</u> 火焰山	左・読／訓	○
1月31日	第十六回 復讐	左・読／訓	○
1月1日	第十七回 遁逃	左・読／訓	○
1月2日	第十八回 新聞紙	左・読／訓	×
2月3日	第十九回 議決	左・読／訓	◎（船図）
1月4日	第二十回 踪跡	左・読／訓	◎
1月5日	第二十一回 船室内	左・読／訓	○
1月6日	第二十二回 巡視	左・読／訓	○
1月7日	第二十三回 バタビヤ府	左・読／訓	○
1月8日	第二十四回 談判 だんぱん	左・読／訓	○
1月9日	第二十五回 砲臺 たいはい	左・読／訓	◎
1月10日	第二十六回 天上、天下	左・読／訓	×
2月11日	第二十七回 空中 くうちゅう	左・読／訓	◎
2月12日	第二十八回 砂糖圃	左・読／訓	○

人 文 学 報

2月13日	第二十九回	モルヒネ劑	左・読／訓	○
2月14日	第三十回	循環	左・読／訓	○
2月15日	第三十一回	盛事	左・読／訓	○
2月16日	第三十二回	クロコダイル	左・読／訓	○
2月17日	第三十三回	伍長	左・読／訓	◎
2月18日	第三十四回	大患	左・読／訓	◎ (図鑑)
2月19日	第三十五回	散兵	左・読／訓	○
2月20日	第三十六回	大穴	左・読／訓	○
2月21日	第三十七回	帆布 ^{ほもめん}	左・読／訓	○ (図鑑)
2月22日	第三十八回	紀行	左・読／訓	◎ (図鑑)
2月23日	第三十八[ママ]回	出船	左・読／訓	○
2月24日	第四十回	應接	左・読／訓	×
2月25日	第四十一回	領事	左・読／訓	◎
2月26日	第四十二回	書翰	左・読／訓	×
2月27日	第四十三回	返翰	左・読／訓	×
2月28日	第四十四回	五砲艦	左・読／訓	×
3月1日	第四十五回	雪白艦、大に蛇波洋に戦ふ ^{シヤバ}	左・読／訓	◎ (海戦第一図)
3月2日	第四十六回	酣戦	左・読／訓	◎ (海戦第二図)
3月3日	第四十七回	提督、連破す二戦艦	左・読／訓	×
3月4日	第四十八回	ウェルコム灣	左・読／訓	×
3月5日	第四十九回	日本男子の本分	左・読／訓	×
3月6日	第五十回	謁見	左・読／訓	◎
3月7日	第五十一回	鉄道線	左・読／訓	×
3月8日	第五十二回	地雷函	左・読／訓	×
3月9日	第五十三回	舊帝都	左・読／訓	×
3月10日	第五十四回	騎象天満宮	左・読／訓	◎
3月11日	第五十五回	旅團長	左・読／訓	×
3月12日	第五十六回	接戦	左・読／訓	○ (地図)
3月13日	第五十七回	鎮臺、三路に大兵を出たす	左・読／訓	○ (地図)
3月14日	第五十八回	象、驢 ^{いけどり}	左・読／訓	○
3月15日	第五十九回	生擒	左・読／訓	×
3月16日	第六十回	兩雄、營裏に死戦を決す	左・読／訓	○
3月17日	第六十一回	由樂坡前に大兵を戦はしむ	左・読／訓	×
3月18日	第六十二回	ルタン新聞の通信者	左・読／訓	×
3月19日	第六十三回	蛟龍豈遂に池中の物ならん	左・読／訓	×

挿図の欄に◎とあるのは、単行本にも採用されたもので、○とあるのは、単行されるにあたって省略された挿し絵である。また、○あるいは◎の他に何も注記がないものは、すべてその回の物語に含まれる一場面を描いたものである。倉卒に描かせたものもあったとみえ、たとえば第二十九回の挿し絵などは、「昨日の挿畫、菊川上井兩人は裸^{はたか}にて尻^{しり}を打たるへき筈の處、洋服の敝れたるを穿ち又、緊縛^{しつかり}せられ居るは、繪畫の注文に行違ひありしが爲めなり、謹て讀者に謝す」〔原文左ルビ〕などと翌日に「謝告」を出す羽目になったりもしているが、総じて小説に臨場感を与えることに成功しているだろう。

注記したものについて言うなら、第七回は「作良先生の示せし地圖の大畧は左の如し、圖中の點線は航海の豫定線なり其の黒く抹せし地方は我々か後來侵畧すへき版圖なり」（原文ルビ右）、第十九回は「右に掲けしは第一二等に位する巡洋艦の畧圖なり、前圖は甲版上大砲の裝置を示し、後圖は側面を示す、尤も砲數及ひ位置は艦に因り多少の相違あり、本圖は小説話中の賊艦と知るへし」[原文左ルビ]、第三十四回は「右に掲るはロベルト氏の風俗志中なるダイカ蠻族戰士の圖なり」、第三十七回は「右に掲るはブラウン氏の地誌中なる、ボルネヲ内部蠻部の肖像なり」、第三十八回は「珈琲樹ニ實ヲ結ブ圖」「セレベ斯特産戴角野猪ノ圖」、第四十五回、第四十六回はそれぞれ「海戰第一圖」「海戰第二圖」、第五十六回は「右の圖は東印度諸島と日本との位置大小等を示す」、第五十七回は「右圖は、海王、浮城の二艦が香港より、ジャバのウエルコム灣に至る間に經歷せし圖を示す」のごとく説明が加えられており、小説の理解を助けかつその実事性を強調するための挿図であることがわかる。もちろん龍溪の言によれば、小説を借りてこれらの地誌なり海事なり物産なりを知らしめんとするものでもあった。

さて、一見して了解されるように、第十四回以前は、ただ第七回に地図が付けられる以外は、挿し絵が加えられることはまったくない。ところが、第十四回を皮切りに、連日のように挿し絵が掲げられ、途中やや頻度は下がるものの、挿し絵の存在はごく当たり前のこととなってゆく。そのことと、右ルビが左に移行して俗訓をも示すようになっていくことに連絡のあることは、疑いようがないだろう。第十四、五回を境にして、『報知異聞』はさらなる読者獲得を企て始めたのだった。『報知異聞』が新聞小説である所以は、ただそれが新聞に連載されたからということにではなく、このように、つねにその体勢が読者に向かって開かれているということにある。新聞に連載されていることの強みは読者に即応できることだ。「將棊詰手及び其の圖を掲げ置き候江湖の諸君續々之れに對し名案を投ぜられんことを請ふ」なる投稿の募集を想起されたい。『郵便報知新聞』の改革が読者による紙面参加の推進にあったことを考えれば、『報知異聞』のこの紙面上の変化が『郵便報知新聞』読者による何らかの反応もしくは提言によるものなのではないかと推測することは難しくない。残念ながらそれを知る具体的材料は捜し得てはいないが、少なくとも、この変化が徹頭徹尾読者へ目を向けたものであったことは確かである。

そして『報知異聞』は、第二十七回が第三面に掲載された以外はすべて第一面に登載されたのであって、時には三段を抜くこともあったその挿図が、大いに人目を引いたことは間違いない。「故に一字、一句、一日にても讀者を倦ましむるときは已に小説の本意に反す、……事柄の大小、文字の煩簡、一として讀者に遠慮せざるものなし、如何にせ一回又一回と讀者を賺かし讀ましむべき乎の一事は作家の最大苦心と云ふべき者なり」（『浮城物語立案の始末』）という龍溪のことばと挿図の増加・拡大は直接につながっていよう。そしてその挿図は、時には小説の一場面を描き、時には南洋の風俗自然を示し、といった具合に、よく通俗と啓蒙とを兼

ね備えていたのである。

話をルビに戻そう。第十五回より現われた訓ルビは、回を追うに従って次第に増加する傾向を見せているが、まずその第一の機能を言うなら、難解な漢語の意味を教えることであった。「浮城物語の大体既に豪壯拓落を主とする上は最も激揚の氣ある漢語調、漢文崩しを用ゆ可しと決したり」（『浮城物語立案の始末』）と漢語を多用した『報知異聞』の行文は、広く読者を求める小説としてはいささか難渋であったし、単に読み仮名を振るだけでは不十分な場合もあったであろうことは、容易に想像できる。「一撃粉壺」に「ひとつちにみじん」（第二十一回）、「面色赭紅」に「かおのいろあかく」（第四十回）など、あたかも中国白話小説の施訓のごとき、伝統的とさえ言える例や、「主簿譯官」に「しょき、つうべん」（第二十一回）、「新版圖」に「あたらしきれうち」（第二十三回）など、より耳慣れた漢語の読みを示して意味を悟らせる、明治の新聞に似つかわしい例など、そのルビの振り方は自由自在、挿図と同じく、よく通俗と啓蒙とを兼ね備えていると言えるだろう。そしてまた、「豪宕拓落と滑稽笑諺を主として」編まれた『報知異聞』の、「豪壯拓落」を「激揚の氣ある漢語調」が担っているのだとすれば、「滑稽笑諺」にはそのルビがなかなか与っている。

八木田氏曰く「然らば遁走乎」^{にげるのか}綜理、聲を勵まして曰く「進航を急くのみ何ぞ遁走と言はん」と（余は謂ふ亦た是れ遁走と）^{にげるのだ}（第十七回）〔原文左ルビ〕^{はやくゆく いそにげるではない}

「にげるのか」「にげるではない」「にげるのだ」、会話もしくは内言に振られるルビは、ほとんど話し手の口から出たような色彩をおび、それがまたおかしみを増しているのが見て取れる。漢文戯作の世界がそのままここに接続されているのである。しかも漢文戯作が文人たちのペダンティックな遊戯であったのに対し、ここではその手法は新聞読者の娯楽に供されている。ついでに言えば、上井清太郎の漢学の素養は、四書五經の素読は終えたものの、十八史略は読んだことがあるが後漢書は読んだことがない、という程度であった。

こうして導入された『報知異聞』独自のルビは、おそらくは読者の好評を博したのであろう、単行本化されるにあたっては、全篇を通じて、左に読みと訓とを混ぜて振るこの手法が採用され、しかも、第十五回以前はもとより、それ以降についても、新聞連載時に比して俗訓の数量は増加している。だが、先にも述べたように、明治三十九年に「訂正新刊」として再刊された時にはすべて読みを示す総ルビに改められてしまった。明治二十三年の時点では欠かせなかった通俗と啓蒙が、十六年後にはもはや必要なくなっていたことの、それは証なのだろうか。ちなみにこの「訂正新刊」本では挿図もすべて省かれ、ただ一つ口絵として第三十三回の挿し絵が描き改められ彩色されて付されているに過ぎない。そしてこの口絵、気球が墜落して「蛮族」に捉えられた上井清太郎と医師の菊川清が今にも鰐の餌食にならんとしている構図に変わ

『浮城物語』の近代（齋藤）

りはないのだが、もとの挿し絵では上井・菊川兩人のじたばたとあわてるさまが滑稽に描かれているのに対し、この口絵では、襲いかかろうとする鰐を兩人が発止と睨み付けている。二人の風貌も、同一人物を描いたものとはとても思われないほどの改めぶりで、あの情けなかった上井清太郎が十六年の時を経るとこうも偉丈夫になるものかと、思わず感心してしまうほどだ。ともあれ、ここでは、ルビにせよ挿図にせよ、この小説が読者を強くしかもリアルタイムで意識したものであったこと、すなわち『浮城物語』がその本質として新聞小説であることが、はっきり物語られているのである。

IV 自叙体

『報知異聞』の「緒言」には、こうあった。

原書は日記の類なれば總て本人の自叙体を用ゆ本社之を修飾する亦た其舊に依る書中「余」と稱するは上井清太郎自家を指すものと知るべし

「上井清太郎」が小説中においていかなる人物であるか、その出自は龍溪による緒言がすでに言及していた。出郷以降の経歴については、清太郎自身の口からこう語られる。

最初は相應の學資を帶ひたれとも惡友に誘はれて遊蕩の爲めに過半を浪費し盡くしたり夫より後は頗ふる困窮して前非を悔ひ神戸なる外國宣教師の家に寄食し小使を勤めて専ら語學を修め且つ暇ある節には漢學をも學ひたり然れとも其教師が歸國せし後は又大坂なる他の宣教師に使はれ三年の間、節儉して小遣錢を貯蓄して稍く百圓の高に上りしかは此れより東京に出て身を立るの計を爲さんと横濱に着せり爾後の仕合せは昨夜も申述たる如し
(第三回 好丈夫)

「爾後の仕合せ」というのは宿屋で百円を盗まれたことを指しているが、それはともかく、一読して「一個常情の人を主人公として」（『浮城物語立案の始末』）なる設定が透けて見えるだろう。だが彼はたんなる「常情の人」なのではない。小説の中における彼の役割としてももう一つ重要なことは、彼に外国語の心得があり、またいささかの漢学の素養もあるという点である。「佛語、英語、獨語」も「一と通りの用を辨し得」、^{そろばん}「算術」は「殊に嗜む」ことを確かめたのち、「然らば新聞体の文章は如何ん」と作良は質す。「不文なる癖に小説体の作文を好み折々は地方新聞に投書いたしたることも候先つ日記を書する位は出來申すへし」との答えに作良は「甚た好し」と応じる。「今日の世中は一寸とせし談話までも漢語クズン新聞体の語調を用るの

時世なり」(「浮城物語立案の始末」)と龍溪が語ったごとく、「新聞体」とはつまりは「漢語クズシ」文体のことであり、それを操るには、四書五経の素読は済ませた程度の漢学の素養はとりあえず必要であったろう。そしてまた「小説体の作文を好」むことはそのまま『報知異聞』の原テキストの執筆へと連続するし、それを「地方新聞に投書」していたというのを見れば、すでに発表媒体さえ約束されているのである。「子は通辨を能くし且つ算術も心得、新聞体の文章をも作ると聞けは先づ當分余等兩人の書記兼譯官の心得にて始終兩人に附添ふこと爲すべし」と最終的に上井清太郎に与えられた役割は、彼がこの小説の第一の「語り手」であること、生起することがらはすべて彼の視角から語られることを保証する。だがその視角はあくまで「書記兼譯官」のものであり、物語を進めていく主人公のものではない。彼は役割として物語を語るが、彼でなければ語れないという内在的な特権性を彼自身が有しているわけではない。語るに足るべきことは常に彼の外部に存在している。そして「言語動作嘗て常情の外を出でず」(「浮城物語立案の始末」)という清太郎の視線は、読者にとってごく簡単にそのフレームを確定することの出来る視角であった。「書記兼譯官」たる清太郎は読者に対して何の秘密も有していないし、読者は安心して彼の「報告」を聞くことができるのだ。

物語論の用語で言えば、上井清太郎は「周縁的な一人称の語り手」(F. シュタンツェル)である。物語を進めてゆく主人公は、企ての首謀者である作良義文と立花勝武であって、上井清太郎はあくまで周縁的な人物にすぎない。むろん、彼はたんなる傍観者でも通行人でもなく、作良義文によって「別格取扱」のうち「第十七 主簿兼譯官」たる役を与えられた人物であり、その他大勢の乗組員とはおのずと位置を異にしているし、またきっかけは偶然にあったとはいえ、作良・立花に従ったのは彼自身の意志による。物語の推移を観察された事実として報告するのではなく、それに参与する者の体験として語ろうとするのである。だが、「〈周縁的な一人称の語り手〉によって語られる物語の場合はいずれも、語り手と主人公という両人格の間に潜む緊張関係が、物語の意味構造を支える決定的に重要な局面をなしている」¹²⁾のならば、「兩先生果たして大國に帝たらは余は内閣書記官長たるを失わす」(第八回)なる彼の独白は、やはり「周縁的な一人称の語り手」にふさわしいものとは思われない。形態的にはそうであっても、この小説を他の一人称小説と同列に扱うことには躊躇せざるを得ない。物語論において人称を論じることの意味は、それが表現の質といかにかかわってくるかという問いを前提とするのであって、形態的に語り手がどうであるかを指摘するのみでは、テキストの読みに寄与するところは少ないだろう。では、『報知異聞』の「自叙体」をとりまく枠組はいかなるものであったのか。

龍溪最初の小説『経国美談』の人物設定は、中国白話小説ないしは読本の枠組みを越えつつも、その座標はやはりそこを原点として測らざるを得ない質のものであった¹³⁾。藤田鳴鶴が、ペロピダス・エパミノondas・メルローをそれぞれ「智力。良心。情慾」に配したこと¹⁴⁾は、

大方の読者の賛成を博したにちがいない。そしてペロピダスやエパミノンドスが読本的枠組の上に〈近代〉にふさわしい英雄の姿を打ち立てようとしていたことを想起するなら、それが作良義文や立花勝武と名前を変えていても、『経国美談』と『報知異聞』と、その人物設定の方法にさしたる変動のないことにいやでも気づかざるを得ない。また、作良といい立花といい、小説みずから「立花とは眞姓なるか」「否々余は之を知れり、然れとも未た之を語るへからず」（第五回）と語らねばならないほど、その命名の意図するところもあまりに露骨である。智仁勇の三傑に代えて、文武の両雄。単行時に加えられた依田学海の回評が作良と立花について「寫出二生容貌人品一箇是智一箇是勇」（第三回）と評するのを見ても、人物像の淵源が奈辺にあるか、明らかだろう。さらに「別格取扱」の「第一 大統領」に作良を、「第二 海陸兵事総理」に立花を配し、官位の高下によって注意深く武の上に文を置くその手口。星によって命を与えられた豪傑たちに代わって登場するのは、官位によって役割を果たす顯官たちである。

私か先年日本の青年に冒険外征の思想を起させたいと考て、浮城物語を書いた、其時も困たのは人物の姓名であつた、主人公ともいふべき人物の名には困りました、段々考へて、是は木の名盡して行くが宜いと考へた、それで大立物をば作良某、立花何某とした、夫の書を御覧になると分ります、大抵の姓は皆な木の名である、旨く書いてあるから一寸と分らぬですが、木の名である¹⁵⁾

はたして萩やら笹野やら菊川やらの姓がうち続くのを見て「一寸と分らぬ」ものかどうかはさておくとして、龍溪がのちにこう語り、話の枕に「馬琴が切足澆太郎或は穀樂四九次郎綾丑とかいふ名を付けた」などと持ち出している、それは何ら驚くにはあたらない。徳富蘇峰が「第十九世紀の水滸傳」¹⁶⁾と評したごとく、『浮城物語』は明治の読本なのだから。

上井清太郎とは言えば、ひたすら勇猛ではあるが読者の笑いを誘うほどに滑稽なメルロー、あるいは張飛や武松に代わって、「主簿兼譯官」として登場し、「常情の人」なればこそその滑稽さを演じて読者の笑いを得ようというのだ。「主簿兼譯官」であること、「常情の人」であること、いずれも明治の新聞読者にとって身近な、あるいは自分自身であるかもしれない存在であった。立身出世を求めて上京する書生たちのひとつの典型でもあろう。だがその存在が典型であるがゆえに、「自叙体」によって語られることばは、その役割を出ることはない。まず「常情の人」「主簿兼譯官」たる上井清太郎を置き、彼の口から語らせたところを「自叙体」と呼んでいるにすぎない。だが明治二十年代の「自叙体」がすべてこのようなものであったわけでは、もちろん、ない。

「自叙体」ということばから直ちに想起されるテキストの一つに、森田思軒が『国民之友』第八号（明治二〇年九月十五日）に発表した「小説の自叙体記述体」がある。依田学海の「俠

美人」の評から説き起こしたこの文章で思軒は、「斯く己れを以て書中の一人物となし或ハ書中の一人物を以て己れとなし唯た此の一人物を主位に置き通篇の鏡花水月皆な之を賓位より影幻し出たすハ余假りに名つけて自叙の躰と云ふ」と自叙体を定義する¹⁷⁾。そこでは自叙体は、第三者の描写にかかる記述体と対照されてこう称揚される。

尋常の記述躰か衆景衆情を一時に寫すの妙を具するにも拘はらず表裏幽明を一齊に描く
の妙を具するにも拘はらず一人物か某の場合某の境遇に立ちし時の感情有様を刻畫して
切實易ゆ可らず讀者恍然神馳せて現に之を目睹する如き想あらしむるの妙ハ自叙躰獨
壇の處にして記述躰の企及し難き所なり

語っている人物が、その人物にしか見聞きできず、感じるができないものを、その人物の口から語ること。その表現の絶対性に、思軒は着目している。「人の話を聞く時に之を他人より又聞きに聞くと本人より直聞きに聞くとハ其話の我心に感する度合に淺深著しき相違存する者なり是ハ他人の悲喜を悲しく喜ハしく物語る事ハ己れの悲喜を其儘に吐露する事の身に染むに及かざればなり」。語られることばは、代替不可能な、唯一無二のことばとして提示されるべきなのである。だが、『報知異聞』の自叙体のことばは、そのような絶対性をもっていない。無惨にも「繁を刈り冗を去て更に修飾を加へ^{しうしよく}」られてしまい、スタイルのみ「其舊に依る」と言うのだ。上井清太郎が送ったのは書簡であり、その書簡は「日記の類」であった。だがこれを書簡体小説とも日記体小説とも呼ぶことはできないだろう。形態的な問題より何より、こういった小説における原稿の編集者は、その語り手固有のことばを改竄してはならないからだ。全知全能の語り手のことばは、それが全知全能であるゆえに、誰のことばでもない。だが一人称で語られたことばは、語り手に所有されたことばであり、その語り手に固有のことばなのである。

だが、『報知異聞』は躊躇しない。無頓着に「記者曰く以上作良氏の述へし土地産物の條はモーレイ氏の商業地理書の説に同じ又風俗の條はブラウン氏の世界風俗志に同じ」（第十三回）などと注釈を付けても、「余」と「記者」の間には何らの緊張関係もないのである。『報知叢談』では、翻訳という形で変容は加えられていたが、それでも一人称で語る語り手のことばは尊重されていた。表現が個人に属すること、その小説における極点が一人称小説であるとするのなら、龍溪の表現は個人へと向かわない。彼のことはつねに多数の読者に享受されなければ意味がないのである。「若し自己一家の好みを以てすれば今少し長く書きたし密に書きたしと思ふ處も甚だ多かりしが、斯くては讀者の機嫌を損ぜんかと、省畧の上にも省畧を加へ勝ちと爲れり」（『浮城物語立案の始末』）と語るとき、思軒が『西文小品』を『国民之友』に移したときに「謂はゆる一目而過の間に了々ならしめむと欲せは勢ひ往々省畧する所と擷取して已む

所とあるを免れず是をもて其極讀者と譯者と交も慊焉たるに歸して止む」と語るときとでは、表現に対する態度には明らかに懸隔がある。

『報知異聞』が「自叙体」を採用する意味は、もっぱら実事性の確保、それも枠組としての実事性の確保にあった。同時代的な語り手を設定し、「主簿兼譯官」の役割を負わせるのは、それを強化するためである。表現の固有性をもたない枠組の実事性。新聞の紙面にこれほどふさわしいテキストもないだろう。したがってそこに語られることばは、より読みやすくおもしろくするためになるように書き直されることに抵抗しない。実事へ向けてそして読者へ向けて大きく開かれた小説にとって、ことばは私有されるべきものではないのである。

おわりに

「序跋無功の今日に幾多名士の羊頭を掛けて賣出したる「浮城物語」は少くも不活眼社會を驚かしたるならん」¹⁸⁾との一文から内田魯庵の激しい批判が始められたように、徹頭徹尾新聞小説として書かれた『報知異聞』が『浮城物語』として単行されたとき、その書には、森田思軒、徳富蘇峰、森鷗外、中江篤介、犬養毅による序文が寄せられ、連載時にはなかった漢文の回評が依田学海の手で加えられていた。あたかも紙面から抜け出した新聞小説を守る砦のように、それらは小説を圍繞し防御する。『報知異聞』が『郵便報知新聞』の読者に供されたとき、序文や題言は必要なかった。漢文の回評に至っては、再読する読者に楽しみを与えようとの意図があったにせよ、ルビを加え挿図を増して読者の底辺を広げようとしていた連載時の方向とは逆行するものであろう。そして序跋であれ、回評であれ、その読者として想定されているのは、いささかなりとも文学的素養のある者であって、新聞連載時の読者層からは微妙に重点がずらされている。

逍遙は「新聞紙の小説」と「冊子」のそれとの違いを執拗に繰り返していた。だが龍溪が「小説は不善ならぬ娛樂を世人に與る者なり」（「浮城物語立案の始末」）と論じるとき、その小説の媒体には新聞か単行かの区別はない。「又新聞紙上に掲る小説は一卷の冊を爲して世に出る小説と其趣を異にするを知らざる可らず」（同）と言われてその内容を聞いてみれば、「小説欄内を除く外新聞紙の本色として、全紙面の記事は皆騒々しき其日への出来事ならざるは無く、切たり張つたりの修羅場を現出す。此修羅場に隣て忽ち小説の別天地を見る。一方は熱の極なり、一方は静の極なり、随分調子の合ひ難きものとす」ということであり、逍遙や思軒のなす弁別とはまるで違う体のものである。結局、逍遙が「新聞紙の小説」として論じた性質、すなわち「有益にして面白きもの」が、龍溪にとってはすべてであった。だが『報知異聞』が『浮城物語』となったとき、小説のすがたには確かに変化が生じている。『報知異聞』はその本質として新聞小説であるはずなのに、どうかして「冊子」にふさわしい衣をまとうとして

いるかのようにさえ見える。

小説が新聞に掲載されている限り、逍遙と龍溪は対立しない。だがそれが単行されたとき、逍遙が一方で確保しておいた「純然たる文學的小説」のすがたが龍溪の目に入る。逍遙はある意味で、「啓蒙家の文学」（越智治雄）を新聞小説に囲い込もうとしたのであり、「新聞紙の小説」と「純然たる文學的小説」とを分離しておくことで、「純然たる文學的小説」の確立をもくろんでいたのだ。『浮城物語』は住み分けを拒否し、序跋や評語で武装して、こちらこそが真の小説なのだとか叫ばずにはいられなくなる。むろん、序跋や評語は近世小説の常套であって、その武装はいささか旧弊の感は免れない。が、近世小説を基盤にしつつ、新聞という近代メディアに徹底的に適合させることで小説に新たな領域を開拓しようとしたところに『浮城物語』の近代があったとするなら、新聞からこの小説が抜け出したときにその旧弊のみが目立つのも、ゆえなきことではない。

そして、

小説は美術的の文字たらざる可からず、「美」の約束を守らざるべからず、人間生活を寫すをもつて目的となさざる可からず、人と運命との間を規定する天然の法則を出さざる可からず、動力と反動力とより來れる行爲を寫さざる可からず¹⁹⁾

あるいは、

小説は人間の運命を示すものなり、人間の性情を分析して示すものなり。而して最も進歩したる小説は現代の人情を寫すものにして、此以外に小説なしと云ふも可なり²⁰⁾

と強調されるごとく、小説においてすべての要素が混淆していた時期を終えて、「美術」を上、「娯楽」を下に劃す視線が定着しつつあったことは確かだ。『浮城物語』の存在によってむしろこの視線はさらに強固なものとなっていった。「娯楽」は小説の名に値せず、せいぜいのところ「新聞紙の小説」どまりだというこの視線は、以後も絶えることなく近代文学を支配してゆく。だが近代小説はひとり「美術」にのみあるのではない。『浮城物語』の語ることばは、固有性をもたないことば、消費されることば、伝達のためのことば、そして共有されることばが近代においてどのように生成されてゆくかを教えてくれるであろう。

批判にさらされてのゆえであったかどうかはつまびらかではないが、マダガスカル島領有までもくろんでいた『浮城物語』は、わずかに蘭領インドネシアの独立運動にかかわったのみで、その筆を絶つ。そして押川春浪が『海底軍艦』によってその跡を継いだとき、『浮城物語』は自身としてはいささか不本意な系譜の祖として、「純然たる文學的小説」の外に座を与えられ

ることになる。

注

- 1) 奥付に「明治二十三年四月十六日出版」とある。
- 2) 『政治小説研究』下巻（明治文学研究 第十巻，1968，春秋社）所収。なお同氏の『海洋文学と南進思想』（ラジオ新書94，1942，日本放送出版協会）も、『浮城物語』について多くを教える。
- 3) 『近代文学成立期の研究』（1984，岩波書店）所収。初出は『近代文学の検討』（論集「文学史」第一輯，1962，白帝社）。『矢野龍溪集』（明治文学全集第十五巻，1970，筑摩書房）にも収める。
- 4) 『文学の近代』（1986，砂子屋書房）所収。初出は『国文学』臨時増刊（1975.3，学燈社）。
- 5) 齋藤久治『新聞生活三十年』（1932，新聞通信社）は「それまでは僅か五六千の發行に止まった報知が，一躍二萬五千に達したのであつた」と記す。また山本武利『近代日本の新聞読者層』（1981，法政大学出版局）によれば，明治二十三年の『郵便報知新聞』の一日の發行部数は20568部である。
- 6) 明治十八年十二月二十七日の「讀賣雑談」欄に「新聞紙の小説」と題して「聯畫閑人」の名で加藤紫芳が以下のように記している。

或る人閑人を語りて曰く足下等の従事する處の讀賣新聞に記載する處の續話は殊更に奇異の説を構造し又は猥褻の字句を狹さむ等の事なしと雖も其書く處のもの小説に類し然も趣意も無く寓意も無く唯事實を述るに過ぎれば此の如きものを他の雜件と混載せんよりは寧ろ純然たる小説を編述して之を別欄に記載するに如すと……試みに其例を歐米の新聞紙に求めたるに毎週發刊の新聞紙と雖も其例少からず現に佛國のペチージュールナル（小新聞と云ふ意）の如きは日々の發刊にて紙面は其名の如く甚だ廣大ならず我讀賣より一寸強も小き小新聞ながら日々其紙面の下段に二個づつの小説を掲げ然も佛國內にありし事は大小漏さず記載するとの事にて大いに社會の信用厚く日々發刊の紙数六十萬餘部の多きに達すると云り然れば我讀賣新聞に小説を掲ぐる敢て不可なきに依り來春よりは別欄を設け日々二章づつ記者の編述したるもの或ひは歐米の小説中最も佳なるものを選びて登載し自餘の小説類似の續き話は一切廢さん事を希望せり……〔原文総ルビ〕
- 7) 『報知七十年』（1941，報知新聞社）による。但し桜痴の非難を『浮城物語』の連載時であるとするのには従わない。
- 8) 『国民新聞』同六月二十八日―七月二日にも掲載されたが，字句にいささかの異同がある。ここでは『郵便報知新聞』を底本にした。
- 9) これについては藤田淑禎「森田思軒の出發——『嘉坡通信報知叢談』試論——」（『國語と國文學』1972.4）や小森陽一「〈記述〉する「実境」中継者の一人称」（『構造としての語り』，1988，新曜社）に詳らかである。
- 10) 拙論「〈小説〉の冒険——政治小説とその華訳をめぐる」（『人文学報』69，1991.12）
- 11) 「幾區にも仕切りあり」（第十八回）の「幾區」に右ルビ「コンパートメント」，左ルビ「いくつ」と振るように，例外がないわけではないが，これとても，右ルビが読みを示しているわけではない。
- 12) F. シュタンツェル（前田彰一訳）『物語の構造』（1989，岩波書店）第四章
- 13) 拙論『〈小説〉の冒険』（前出）参照。
- 14) 『経国美談』前篇末尾尾評

- 15) 「古來理想の幸福國の種類」(『龍溪矢野先生講話 社會主義全集』1903, 現代社)
- 16) 『^{報知異聞}浮城物語』序文
- 17) 明治二十年代における自叙体への関心のありようについては、この思軒の文の細かな分析も含めて、前掲『構造としての語り』に収める諸論文に詳しい。
- 18) 『『浮城物語』を読む』(明治二三年五月八日, 『国民新聞』)
- 19) 「報知異聞(矢野龍溪氏著)」(『国民之友』明治二三年四月三日)
- 20) 注18に同じ。